翻訳

民族問題評注

オットー・バウアー著
丸山敬一訳

訳者はしがき

私は本誌前号（第三四巻第一・二合併号、一九九九年十月）にカール・カウツキーの「民族性と国際性」を訳載した。これはオットー・バウアーの大著『民族問題と社会民主主義』（Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie. Wien 1907）に対する書評であった。この書評が出るとすぐにオットー・バウアーは反批判を書いた。それがここに訳載した「民族問題評注」（Bemerkungen zur Nationalitätenfrage. Die Neue Zeit. Jg. 26. Bd. 1. 1908）である。

この二論文を読み比べることによって、我々は民族本質論（民族は言語共同体か性格共同体か）と民族政策論（民族自治政策は有効にして実現可能か）および文化論（プロレタリアートが護るべきものは民族文化か国際文化か）における両者の見解の違いを知ることができるであろう。

民族問題評注

一、民族

民族問題に関する私の研究は、私の敬愛する先生カール・カウツキーによって『ノイエ・ツァイト』の第一付録で詳細に批判されたが、この研究はもともと二つの要因から生じたものであった。一つはいくつかの問題に唯物史観を適用してみるという要因であり、他の一つは、オーストリアの公的生活を支配し、他の国々の政治闘争においてもますます重要になってきている民族問題に対して、包括的で根拠のある態度表明が実際に必要になってきたという要因である。

マルクスと彼の弟子たちは、唯物史観を歴史研究のわずかの領域にしか適用できなかった。それは、まず第一に、社会闘争と政治闘争の歴史、国家秩序と法秩序の変遷を経済的発展との関連において理解することに適用された。ここでは、経済的下部構造とイデオロギー的上部構造との関連が直接的であり、それゆえ、ここではまたマルクスによってわずかの簡潔な、それだけにますます内容豊かな文章の中に要約されている歴史学の方法に関する基本概念の説明も必要とされなかった。なるほど我々は、後に科学と哲学、文学、芸術、宗教の発展の二、三の部分領域をも新しい視角の下に見ることを学んだ。だが、我々が人間の意識のこの領域をその思想内容からのみ見ることで満足し、その中に含まれている形式的な要素や思想内容の中に隠れている気分や感情の中身を大抵の場合無視し、ただ時々顧慮するにすぎないならば、唯物史観の基本命題の中に含まれている諸概念とその関連に関する体系的自覚は、依然として余分なものに見えたのであった。この仕事は、大変重要で実り豊かなものであったが、我々はそれで満足すべきではない。我々は人間の意識のあらゆる現象、すなわち観念や決意の内容だけでなく、気分や感情の内容も、そして内容一般だけでなく、この内容が現れてくる固有の形式をもまた、マルクスの歴史研究の方法が、我々に明確に教えてくれた関連の中に置かなければならないのである。我々がこの仕事をしようとする時、唯物史観に何か新しい、今までそれに無縁であった要素を付け加えることが必要なのではなく、その中に要約され、展開されているもの、その中に萌芽の形で含まれているものを説明しさえすればよいのである。かくして、我々はさしあたり、形式社会学に、すなわち社会団体や社会制度のさまざまな形態の明確な区別に、到達するのである。その時、この社会形態学は、物質的な歴史意識内容の具体的な研究方法になるのである。それは、我々が一方で、さまざまな形態の社会グループの発生を生産力や生産関係の変化から理解することによって、他方で、このような無数の社会グループのいずれもが、具体的な歴史的個人の性格の一面をどのように明確に規定しているか、また個人の性格の多様性、あらゆる個人の人格的特質、彼の思想、感覚、意志の特徴が、まさにあらゆる個人がこれらの無数のグループの他人によっ

て取り巻かれており、あらゆる個人の中にこれらのグループの他人が結びついているという事実によって、どのようにして生じてくるのか、を明らかにすることによって可能となるのである。かくして、社会形態学は、労働様式と労働関係の発展を具体的な個人の意識現象と結びつける中間項の理論以外の何物でもないが、それ以上に歴史の直接的な経験的現象にすぎないのである。

そのような形式社会学は、二種類の社会現象を概念的に区別すること、しかし同時にまたそれら相互の間の規則的な依存関係を理解すること、を我々に教えた。個人は各々一人一人に同じ力、同じ生存様式、あるいは同じ運命が決定的に作用するか、あるいは持続的に作用する（その際さらに、共通の体験や苦痛が問題となっているのか、それともただ単に同種の体験や苦痛が問題になっているのか、を区別すべきであるが）ことによって、一つのグループへと結びつけられるのである。グループを結びつけている紐帯は、ここでは個人を外部から結びつける規則ではなくして、彼らを内的に結びつける力である。すなわち、あらゆる個々の思想や行動が、他の諸力とならんで、単に彼の中だけでなくグループの他のすべてのメンバーの中に生きている力をもまた規定しているという事実である。私にとって私のものが、グループの他のメンバーの全員にとって彼のものなのである。そのようなグループを、私はゲマインシャフトと呼ぶ。だが、他方で人間は外的な規則によってもまた結びつけられている。すなわち、行動の規則（慣習、法）、観念結合の規則（科学）、観念と音の結合の規則（言語）、等々（その際さらに、人間の意識一般の規則性の中に根ざしていて、歴史的発展の過程において初めて徐々に展開されることになる必然的な規則が問題になっているのか、それとも単に一定のグループにのみ通用する任意の規則が問題になっているのか、を区別しなくてはならないが）によって。同じ規則への服従も、同様に諸個人を一つのグループへと結びつける。私は、そのようなグループをゲゼルシャフトと呼ぶ。ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの形態の違いを区別することと、その相互の依存関係を明らかにすることが、社会形態学の課題である。

民族の本質に関する私の分析は、そのような研究から生じた。だが、その計画的な続行は、政治闘争の実践的必要によって妨げられた。オーストリア社会民主党は、ずっと以前から民族間の破壊的な権力闘争によって、その活動を阻害されており、多くの事件が、労働者階級もまた民族闘争の中に巻き込まれ、プロレタリア軍の統一と団結も民族対立によって破壊されるのではないか、という危惧の念を我々に抱かせた。そのような状況のもとで、私は、私の取り上げた素材の欠陥の多さや不完全さを十分自覚していたにもかかわらず、民族問題に関する私の研究の暫定的な成果を公表することを私の義務だとみなしたのであった。そのような状況のもとではまた、この本の直接的な政治的効果を減ずることのないように、難しい方法論的詮索で本

書を煩わしいものにすべきではない、と私は考えた。それで、私は私の民族理論を、その根底にある理論、すなわち私によって計画された社会形態学の見取り図、唯物史観の中に萌芽の形で含まれている社会グループに関する理論、生産力と生きた個人との間の媒介をなす理論の説明なしに、公表しなければならなかったのである。

たしかに本の著者は、読者に対して、自分の概念の発生史にまで配慮してくれるよう要求すべきではない。だが、この場合には民族の本質に関するカウツキーの見解と私の見解の間の対立を明らかにするために、私の本の歴史を語ることがどうしても必要なのである。というのは、カウツキーは、私の本の決定的な欠陥――そこからすべての、あるいはほとんどすべての他の誤りもまた説明できるというのであるが――が、「民族を結び付ける紐帯として、あるいはむしろさまざまな紐帯の中でも最も強力なものとして、誰の目にも明らかなもの、すなわち、言語を認めること」を拒否しているところにある、というのであるから。彼は、私の本の第一節から、同じ言語を使っているにもかかわらず違った民族もあれば、ユダヤ人のように共通の言語をもっていないのに一つの民族をなすものもある、という二、三の文章だけを引用した後、次のように付け加えている。「これがバウアーが言語について述べたすべてである」、と。

この表現は正しくない。私の本の第一節は、導入的な序論以外の何物でもなく、民族の本質の問題には言及はされているが、解決は意図されていないのである。私は、その後初めてそのような解決を引き出すことのできるような事実上の素材を厳選することにとりかかり、そのためにドイツの歴史を使ったのである。ここでは、言語の変化は後続現象として現れるが、同時にまた民族の存在形態の変化の道具としても現れる。すなわち、定住農耕生活への移行、土地の私的所有の発展、互いにいかなる交通もない農民世帯的存在の狭い地域的サークルへの民族の分裂に続いて、無数の方言への言語の分化が起こり、その結果上フランケンの農民と下フランケンの農民は、かつて同じ種族の子孫であり、一つの言語をもっていたにもかかわらず、今日では両者にとって未知の、学校において初めて習得した言語、すなわち、新しい標準ドイツ語の書き言葉によってしかお互いに理解し合えないのである。[1] だが、他方で、ドイツの歴史はまた、どのようにしてまず支配階級――かつては騎士階級、後には知識階級――相互の交通関係から統一語を作り出す傾向が生じてくるのか、次いで、すべての社会関係の完全な変革によって初めて――まず近代資本主義の、次いで社会主義の支配のもとで――いかにして統一語が全民衆の母語となるのか、を我々に教えてくれるのである。この経験的な基盤の上に、私は初めて民族と言語の関係に関する私の見解を展開したのであった。それゆえ、人は私の本の第一節ではなく、第十節の中に私の見解を探るべきなのである。この節において、私は民族が必然的に言語共同体であること、またなぜそうであるのか、について

繰り返し詳細に示した――それゆえ、この点に関してはカウツキーと私の間にはいかなる衝突もないのである。だが、各々の民族はそれぞれ共通の言語を用いている、ということを確認しただけでは、私は満足できない。私はむしろ、なぜこの人間集団が同じ言葉を用いているのに、他の人間集団はそれを用いていないのか、を問いたいのである。どのような力が言語共同体の境界線を引くのか、という問いは交通共同体の概念に導く。そして、我々が今度は交通共同体の境界を因果関係的に確定しようとすれば、我々は文化共同体の概念を経て、最終的に運命共同体の概念に行き着く。それゆえ、もちろん私にとっても共通の言語は、民族のメルクマールの一つであるが、あくまでも第二順位の手段であるにすぎない。「共通の歴史は作用する原因であり、共通の文化と共通の血統はその作用の手段であり、共通の言語は共通の文化の媒介者として、文化の産物であると同時に、それを生み出すものである」。それゆえ、私も民族が言語共同体であることを否定しない。しかし、私は言語の背後にあって、それを生み出し、その変化をもたらし、その通用の境界を規定する要因を探りたいのである。マルクスが、競争の「見せかけの運動」の背後に、「感覚的には知覚されえないが真の運動」を、また経済的事件の単なる「現象形態」の背後に、その「内的な本質」、「真の関係」を探ったように、カウツキーのいう「明白なものである」言語共同体は、私にとっては、マルクスのいう「その背後にある」より複雑な社会的形象の「現象形態」であり、その形で「現れて」初めてそれを理解することが可能となるのである。

民族の概念に関する私の分析は、言語共同体の背後に文化共同体を発見する。だが、私的所有の時代には矛盾した運動が現れる。すなわち、一方で、統一した民族文化――それがゲルマン原民族の文化であるか、それともフランク族の文化であるか、はどうでもよいことである――のたくさんの、より狭い、相互に鋭く異なった文化圏への漸進的な分裂、他方で、これらのより狭い文化圏の一つの統一した民族文化への漸進的な再統一、である。人がもし近代民族の生成を理解しようと思うならば、民族の文化的（それゆえまた言語的）統一のこの復活の過程を研究しなければならない。私は、血統共同体と氏族共産主義に基づく古い諸民族が分解し、崩壊してできた諸部分を再び結び付ける諸力を追跡して、その作用は、封建社会と資本主義社会においては、さしあたり支配階級のみに限定されている、ということを発見した。彼らだけが、文化――その道具として共通の言語を使っているのであるが――の共通性によって、一つの統一した、鋭く区画された民族共同体に結合されているのである。他方、労働する人民階級は、まだ地域的な閉鎖性の中にとどまったままであり、民族の共通の体験、それゆえまた民族の共通の言語からも締め出されたままである。近代民族の発生過程の分析や、わが道を行こうとする諸部分を結び付ける力の研究から、一定の発展段階においては、支配階級のみが民族共同

体へと結び付けられ、彼らのみが民族同胞となっているが、他方で労働する人民層は単に「民族の隷属民」にとどまっている、という認識が得られる。これに対して、カウツキーは、まさに農民こそが最も忠実な民族的特性の保持者である、といって異議を唱えている。だが、農民がその民族性をまだ奪われていないということは、彼らが狭い文化圏の中に閉じ込められ、より広い交通共同体の中に巻き込まれていないという事実に由来するものである。かくして、農民はよその地域の民衆の文化や言語に対して自分たちの地域的特性を保持しており、より狭い地域的な文化共同体を統一した近代民族へと融合したあの大運動からさしあたり締め出されているのである。過去の統一した民族からの長期にわたる分化過程で生じてきた特性を農民が今なお保持しているという事実は、農民が数百年にわたって続いてきた発展過程においても依然として、現在と未来の統一民族を生み出す統合過程から締め出されたままであった、という認識を否定するものではない。それゆえ、私は農民を「民族の隷属民」と呼んだのである。

近代資本主義の支配の下での社会的大変革が初めて、民族の文化的統一を確立する、あるいはむしろ再確立する過程の中に、働く人民階級をもまた巻き込んだのである。だが、この運動は、二様の形態をとって進行した。支配階級と被支配階級を含む歴史的民族においては、この運動は、労働する人民層もまたすでに存在する民族文化への参加権を得るということを意味した。これに対して、被支配階級と被搾取階級のみからなっている歴史なき民族においては、この運動は、もはや太古の文化要素の単なる伝承に依拠する文化ではなく、生き生きした、進歩的な民族文化が初めて発生するということを意味した。それゆえ、この二つの種類の近代民族において、プロレタリアートの階級闘争もまた異なった民族的内容をもっており、この二種類の民族の各々が近代民族となる過程において、階級闘争はそれぞれ異なった機能を果たすことになる。私の民族理論にとって最も本質的なこの区別を、カウツキーは完全に見落としてしまった。私がプロレタリアートの階級闘争を進化的—民族政策と呼んだのは、歴史的民族の労働者階級は、階級闘争の過程において初めて自民族の生き生きした民族文化に参加することが可能となるからである。ところが、カウツキーはスロベニア人についてこのことを主張することは、ナンセンスであるといって異議を唱えるのである。スロベニア人はまさに歴史なき民族であり、その下層民衆の上昇過程の意義は、歴史的民族のそれとは全く異なっているのに。

だが、階級闘争の民族的内容に関する私の評価についてのカウツキーの決定的な異論は、もっと他の所にある。彼はいう。プロレタリアートは国際文化の所有のために闘うべきであって、特殊な民族共同体の文化の所有のために闘うべきではない。それゆえ、私の本の本質的な欠陥は、私が文化の民族的要素と国際的要素とを区別せずに、文化をいつも民族文化としてのみ捉

え、その国際的性格を十分に評価していない所にある、と。

カウツキーは次のようなやり方でこの批判に到達した。彼はさまざまな民族の文化を総体として見て、その文化要素を二つのグループに分ける。第一のグループは、すべての、あるいはいくつかの民族に共通の文化要素を含むもの、すなわち国際文化であり、第二のグループは、個々の民族に固有の文化要素、すなわち民族特殊文化である。かくして、もちろん彼は、国際的な文化要素が全文化のますます大きな部分をなしてきており、労働者階級は民族特殊文化とともに国際文化を求めるべきである、というのである。

それに対して、私の思考過程は、その通用範囲から見た文化要素の概念的区別からではなく、異なった民族文化の間の関係の歴史的叙述から出発する。私の本の歴史的部分において――封建社会、初期資本主義社会、社会主義社会に関する節において――すでに私は、他の民族の土地の上に育った外来の文化要素を、他の民族がどのように受け入れるか、を示した。次いで、理論的総括に際して、「文化内容の物質的同化」のこの過程を一般的に叙述し、さらに個人に対して二、三の同様に強力に作用する文化の結合、すなわち、「文化的混合」という最も極端な場合を論じた。最後に、私は私の本の十二、十三節という特別な節を、外来文化のこのような浸透、すなわち文化の国際化は避けがたいことである、という証明に捧げた。それゆえ、私が近代文化の国際的性格を無視しているという非難は根拠のないものである。だが、私は民族的意識内容と国際的意識内容の理論的区別では満足せず、外来の文化要素の受容の過程を心理学的に記述しようと努めた。なぜなら、各々の民族のイデオロギーは、他の民族によって受容されることによって、空間的に作用を及ぼし続けるだけでなく、それらが未来永劫にわたって自民族のイデオロギーの発展を共に決定することによって、時間的にも生き続けるからである。社会のより高い発展段階において、新しい観念や新しい価値評価の方法が発生したとすれば、それらは民族の伝統的な意識内容とかかわることになり、それとの闘争に陥るのも珍しくなく、それによって変容をこうむるのである。いくつかの民族によって同じ文化要素が受容された時でさえ、それらは各々の民族において異なった意識内容とかかわることになり、それぞれの民族において、その特殊な全歴史によって規定されたイデオロギーとの闘争の過程で特殊な民族的色彩を帯びるのである。たくさんの個別観察に基づくこの認識は、人間の意識の連続性に関する一般法則の単なる特殊な現象形態にすぎず、私によって記述された民族的統覚も心理学の一般法則の特殊な現れ方にすぎないのである。たとえば、なぜ生活様式、文学、芸術、政治が、なぜカウツキーが技術的文化と呼ぶ文化要素が、なぜ資本主義と社会主義が、今日作用している力の相対的類似性にもかかわらず、イギリス人とフランス人の所では、ドイツ人の所とは必然的に全く異なった形をとらざるをえないのか、を理解しようと思うならば、人はこの事

実を無視すべきではない。カウツキーは、この違いを言語の違いから説明することはできまい。資本主義的生産様式の法則の同じ作用にもかかわらず、異なった形のイデオロギーが形成されるのは、資本主義の同じ力がそれぞれの国で異なった精神的素材に働きかけるからであり、その素材の差異はそれぞれの民族の歴史的発展の特質によるのであり、そこから説明されるべきである――この認識が初めて我々の精神生活の具体的現象を説明できるものにし、説明できない民族的性格の幻想や民族魂の神秘主義から初めて我々を解放するのである。もちろん、この認識はまた、理論家が抽象作用によって多くの民族的特殊文化から引き出す国際文化なるものは、どこにも独立して存在するのではなく、個々の民族文化の中にのみ現れる、ということをも我々に示すのである。民族文化は、その中に国際文化、すなわち、すべての、あるいはいくつかの民族に共通の文化要素が潜んでいる器なのである。意識一般が、多くの個人の意識の中にのみ現れるように、国際文化も民族特殊文化の中にのみ現れる。理論家は、文化の諸要素をその通用範囲に従って区別し、そのようにして民族文化と国際文化の差異に達することができるが、しかし、すべての、あるいはいくつかの民族に共通の文化要素の概念的な強調によっては、民族文化以外の他の文化は何処にも存在せず、国際文化はさまざまの民族文化に共通する要素の総体以外の何物でもありえない、という事実を否定することはできない。人は、民族の歴史を起こらなかったことにすることができないがゆえに、民族文化の差異も否定することができないのである。それゆえ、プロレタリアートの階級闘争は、民族文化の所有をめぐる闘争なのである。

民族文化の概念をめぐる論争においてすでに、我々が唯物史観の中に要約されている一連の思考内容の説明をせずに済ましてきたことが残念である。そのような社会形態学は、結果として生じたイデオロギー現象が、新しい生産関係によって形成された意識内容と過去の時代の生産関係に根ざしている伝統的な文化要素との結合からのみ説明されうる、ということを示すであろう。このことが、民族的統覚に関する我々の学説の一般的基礎であり、それ自身がまた民族の生成過程におけるプロレタリアートの階級闘争の役割に関する我々の理論の基礎ともなるのである。

だが、我々が文化共同体の概念から、運命共同体というもう一段高い概念に登った時、社会形態学の欠陥がそれだけはっきりと感じられる。カウツキーが、民族に関する私の定義を地方自治体、国家、ツンフト、政党、株式会社もまた運命共同体である、と宣言することによって、反駁しようとした時、それはただ、彼が運命共同体という言葉にのみこだわり、私がこの概念に与えた明確な限定を看過することによってのみ可能となったのである。なぜなら、カウツキーによって言及されたような諸組織は、私の用語法によれば、ゲマインシャフト現象ではなく、ゲゼルシャフト現象であって、それゆえ、それらは私のい

う運命共同体ではないからである。たしかに、民族の内部により狭い運命共同体が存在するが、私が私の本の第十節で示したように、これらのより狭い運命共同体を民族から概念的に区別することの困難さは、統一民族形成の傾向が、「民族の隷属民」である彼らをまだ捉まえていない限りで、独立した民族への一定の発展段階をなしている、という事実によるのである。これらのより狭い共同体は、「過去の共産主義民族の分解の産物であり、未来の社会主義民族の素材」である。民族的統合過程が、民族内部のこれらのより狭い運命共同体をあらかじめ捉えないならば、それらは独立した民族へと成長していくにちがいない。

我々は言語共同体から出発して、文化共同体を経て、運命共同体へと上昇した。もし今我々が逆に、運命共同体から文化共同体を経由する道を戻ってくるならば、我々は、一方で、文化共同体が生み出す言語共同体へ、他方で、運命の共通性が性格の類似性をもたらすがゆえに、性格共同体へと到達する。

カウツキーは、性格共同体としての私の民族の定義を、すべての近代民族内部の個人間の性格の大きな相違を指摘することによって、経験的に反駁しようとした。しかし、彼がこの試みを企てることができたのは、ひとえに性格共同体の概念を、私が私の本の第一節で確認した暫定的な意味において理解し、第十節で与えられることになる展開された、最終的な意味において理解しなかったがゆえである。なぜなら、ここにおいては性格共同体はもはや個人の性格の経験的類似性を意味するものではなく、その形成に際して彼らすべてに共通の力――たとえそれと共に作用する他の力が、まだどれほど異なったものであろうとも――が作用しているという事実を意味しているからである。個人の性格は、多くの構成要素の合力であり、これらの構成要素の一つ――民族の運命、民族文化――が、すべての民族同胞の個人的特性を共に決定するのである。他の構成要素も似ている所では、似た性格が発生するだろうし、他の構成要素が異なっている所では、同種の構成要素とそれらの異なった構成要素との共同作業から生ずる個人の性格は、大変異なったものになるであろう。だが、一つの、民族的構成要素の共通性が、これらの経験的にまったく異なった個人たちをも、一つの性格共同体へと統合するのである。

もちろん、人は民族的性格共同体のこのように地味な、通俗的な概念とは全く違った概念が、はたして役に立つ物であるかどうかを問うことができるであろう。この問いに対する答えは、その概念が私の民族理論の基礎になっている、あの社会形態学が初めて与えることができる。この学問は、我々が個人の思考、感情、意志、行動を、またあらゆる社会的事件の直接的内容、それゆえあらゆる社会的研究の出発点を、生産力や生産関係の発展と関連付けなければならないが、それはもっぱら個人を法則的規定性という側面に従って孤立して捉え、人類と自然との闘争に由来する性格共同体のこれらの側面の各々に従って配列することによってのみ可能となる、ということを示すであろう。

このように異なった性格共同体の異なった結合関係から個人の差異が生ずるのである。それゆえ、このような性格共同体の探究が、科学としての歴史学の最高の課題なのである。

カウツキーの言語共同体は、ゲゼルシャフトであり、私の性格共同体はゲマインシャフトである。ゲゼルシャフトはゲマインシャフトと関連付けられなければならず、前者は後者によって設定されるものとしてのみ理解されうるということを、私の社会形態学が証明するであろう。私はその根本思想を遠からず世間に公表したいと思っている。その時まで、カウツキーとの決定的な論争を延期したいと思う。しかし、カウツキーの批判が、我々を私の全理論の基礎でありながら、私の本の中では十分に展開されなかった概念や思想に連れ戻すという事実が、カウツキーの批判の徹底性と私の体系の正しさを証明するものである。彼は、私があらゆる攻撃に対して私の立場を守ってくれる防塁を、私の立場の外的で、偶然的な理由からまだ前進させることのできなかった、まさにその場所で私を攻撃したのであった。

二、国家

カウツキーの民族理論と私のそれとの対立は、民族と国家の関係に関する我々の間の見解の対立をもまた規定しているのである。カウツキーは、民族を言語共同体に還元したので、民族性原理もまた多民族国家の言語的困難さから引き出した。多民族国家は、成員の間の意志疎通の困難さのゆえに、能率が悪く、それゆえ、存続できないというのである。私は、多民族国家が実際に意思疎通の純粋に技術的困難以外の他の理由で崩壊したという例を知らない。そして、まさにオーストリアにおける激しい言語闘争は、はるかに深い所にある対立が言語闘争の形をとって現れてくる――もし意志疎通の技術的問題のみが解決されるならば、すべての言語紛争はたやすく克服され、多民族国家の能率の悪さも容易に除去されるであろう――ということを私に教えたのである。言語闘争の激しさとその解決の困難さは、まさに民族が単なる言語共同体以上のものであるという事実に根ざしているのである。

したがって、私が民族性原理の力を彼より低く評価している、というカウツキーの主張は私には全く理解しがたいものである。私が私の本の三十節で素描した社会主義ヨーロッパの政治組織のイメージは、カウツキーが彼の論文の末尾で展開したイメージといかなる点でも異なっていない。私はさらに先に進み、いかなる傾向が資本主義社会の内部においてもなお、古い多民族国家の解体を可能とするのか、について詳細に証明しようと試みた。あらゆるドイツ至上主義者にとっては冒瀆にしか見えないこのような研究の中に、カウツキーが私の罪に帰した多民族国家への特殊な愛の痕跡を見出しうるというのを聞いて、私は大変驚いたのであった。

だが、もちろん愛情はほとんどないが、それだけにより冷静

な研究が明らかにするものは、資本主義社会の内部でのオーストリアの崩壊は、ほとんどありそうにないこと、もしありうるとすれば、すべての国のプロレタリアートが望まず、政治的目算に組み入れることのできない帝国主義による世界的大変革の結果としてのみであること、これである。そこからオーストリア社会民主党にとって、さしあたり見通しうる時間の範囲で可能な国家の枠組みの中で、労働者階級の階級的利害と階級的イデオロギーに最も適合する民族間の利害関係の調整のために闘うという義務が生ずるのである。この闘争の目的に関して、私とカウツキーは同じ意見である。カウツキーはただ、民族自治の有効性の限界のみに言及し、我々の要求の貫徹可能性についての我々の信念を動揺させようと試みた。

カウツキーはまず、民族自治はあらゆる民族問題を解決するわけではない、ということを詳述する。民族問題は、資本主義社会では完全には解決されえないということは、私自身も繰り返し述べてきたところである。だが、民族自治の限界が表面的な観察で見える以上の所にあるかどうかについては、まさに今『カンプ』誌においてにぎやかに討論されている。私はここでは、この討論を参照してくださるよう指示することで満足せざるをえない。

さらにカウツキーは、民族自治の実行が、プロレタリアートのために実際の経済的、社会政策的成果を獲得しようとする闘争の過程に横たわっている障害物を除去してくれるであろう、という考えとも闘っている。私の本の最終章を読み、まさに資本主義発展の最高の段階で、どのような障害物がそのような成果を妨害しているのかについて腹蔵なく述べられているのを知った人は、私がここでこれ以上の指示を与える必要を感じないであろう。しかし、カウツキーはこの認識に基づいて、民族自治を求める闘争を放棄するよう我々に忠告することはしなかった。もちろん、民族自治はプロレタリアートにとっての最悪の危険、すなわち民族的権力闘争によってプロレタリア軍の統一が破られるという危険を除去することができるであろう。

最後にカウツキーは、民族自治の基盤である地方自治行政が、官僚機構やブルジョアジーの抵抗を排して勝ち取られうるかどうか、に疑問を呈している。それに対して私が言わなければならない最も重要なことを、私は『カンプ』誌の第五号で簡潔に要約している。ここで、カウツキーは多民族国家の困難さを過小評価している。十年に及ぶ国家の深刻な危機は、権力者たちをして、国家をかろうじて生かせておくためには、内的な行政権を完全には手放さないまでも、自治団体に組織された民衆と分かちもたなければならない、ということを学ばせたのであった。我々の行政が、全く新しい基盤の上に据えられないかぎり、国家は一日としてその生命を全うしえない。あらゆる官僚的行政改革は、民族対立に出会って挫折する。新しい行政機構をうちたてるという国家の必要性は、民族対立という障害を克服するために、地方自治行政の民主主義思想と結合しなければなら

ない。ドイツ系ベーメン人の自治を求める数十年に及ぶ闘いは、このような方法によってのみ終わらせることができるということを、非常に影響力のある官僚集団もすでに認識している――我々の官僚機構が特に神の恵みを豊かに受けているからではなく、国家の必要が彼らにも弁証法を無理やりたたき込んだからである。民族性原理の力は大変強力なので、鉄のような必然性が多民族国家を駆り立てて、この原理に接近させる。だが、民族自治は国内的な民族性原理以外の何物でもない。

将来のこの問題について、どのように考えるにせよ、我々の諸要求において、また現在のための私の本の実際的成果という点において、私とカウツキーとが見解を共通にしているということが、私にとっては重要である。しかし、我々の戦術問題に関する意見の違いは、おそらく最も深い根拠をもっている。我々二人は、あらゆる民族のプロレタリアートの一元的に統一した戦術のために闘っている。カウツキーは、近代文化の国際的性格を強調し、民族を単なる言語共同体に還元し、言語の違いを階級と民衆の間の意思疎通と一致した行動の障害として嘆くことによって、この目標を最も早く促進できると信じている。それに対して、私は我々の陣営の個々の同志をも魅了しているブルジョア民族主義の力に打撃を加えることができるのは、我々が国際的階級闘争の民族的内容と我々の民族文化共同体の発展と拡大にとっての国際的プロレタリア闘争の意味を暴露し、諸階級がその力を測る戦場において、幸不幸について、諸民族の外的な大きさと内的な豊かさについて決定がなされるのだ、ということをすべての人に示す時だけである。かくして、我々はプロレタリアートに最もふさわしい場所で民族主義に打撃を加えることができるのである。敵を追放することではなく、敵自身の陣営で戦争を行うことを、戦法は教えている。民族主義に反対する闘争においても、我々の師匠の師匠であるヘーゲルが我々を導くであろう。彼は否定ということに関して、次のような言葉を前もって贈っているのである。「真の否定は相手の勢力の中に入っていかなければならず、彼の強さの周辺に身をおかなければならない。彼のいないところで、彼と闘っても事態は進展しない」。

原　注

（1）カウツキーは、ドイツの諸種族が一つの民族から派生したものであり、ドイツの諸方言が一つの言語から生じたものである、という推定を拒否する。私はこの仮説を、反論すべきものとも、不必要なものとも思わない。しかし、カウツキーがこの仮説を正しいものと認めたくないとしても、方言、風習、生活習慣、肉体的外観で非常に異なっているドイツ民族の個々のメンバーは、歴史の真昼のような明るさの中で進展している分化過程の間に、二、三のドイツ種族から生じたも

のであるという事実は、きっと否定できないであろう。たとえば、フランケン種族やザクセン種族は、どれほど強力な分化過程の影響下にあることだろうか。私は決して今日すでに外国民族になってしまった諸種族の破片を考えているのではなく、ドイツ民族の枠内でまだそれほど進展していない分化を考えているのである。私の民族理論にとっては、この事実を考慮するだけで十分である。

カウツキーのあとがき

バウアーは、彼の反論の中で全く新しい観念、すなわちゲゼルシャフトとゲマインシャフトを区別する形式社会学の理念を展開した。それなしでは、彼の民族理論は理解できないのである。性格共同体の探究に、彼は「科学としての歴史学の最高の課題」を見る。それについての彼の理論の概略は、残念ながらこの社会形態学を検証するのに十分ではない。それゆえ、バウアーの民族性の概念に関するこれ以上の論争は、彼の形態学の出現まで待った方がよいと私には思われる。

幸いなことに、実際的な民族政策に関して我々の間にあまり重要な意見の相違がないので、それだけますます待つことが可能となる。ただ私は、「国家の必要が、彼らにも弁証法を無理やりたたきこむがゆえに」「民主主義的地方自治行政の思想」のために、オーストリアの官僚機構が、みずから退位するだろうとは依然として期待していないことを繰り返さなければならない。

いかなる階級にとっても、国家は自己目的ではなく、目的のための手段にすぎない。いかなる階級も、国家の保持のために、国家におけるみずからの権力手段を進んで放棄することはない。このことを今日我々にはっきりと示しているのは、ロシアの官僚機構である。彼らは権力手段の一つを放棄するくらいなら、国家を滅亡させる方を望んでいるのである。

いかなる階級も国家の味方をするのではなく、ただ一定の形態の国家の味方をするだけである。官僚機構が、その維持のために闘っており、その必要が彼らに弁証法を無理やりたたきこむ国家は、官僚制国家であって、民主主義国家ではない。それは官僚制国家を保持し、民主主義国家を阻止するために全力をあげる。

オットー・バウアーと私の間の戦術上の意見の違いについて言うべきことは、これだけである。私は、オーストリアの我々の同志たちが、とりわけ官僚制に関するヘーゲルの原則を肝に銘じてきっとうまくやるだろう、と信じている。

（一九九九・一二・一五）